

## 道具、物と対象

査 博文 (九州大学)

### *Tool, Thing and Object*

Bowen ZHA

The well-known discourse on the tool and its handiness (*Zuhandenheit*) appears in the framework Analysis of Environmentality and Worldhood in General (*Umweltlichkeit und Weltlichkeit überhaupt*) in the first part of *Being and Time*. What precedes this analysis, and at the same time necessarily leads to it, is the formulation of the question of Being. Heidegger reads the three, *Dasein*, the world and the tool-being, in a relationship through an existential analysis.

Heidegger's emphasis on the existential status of the tool leads to a series of challenging insights into its role and significance in *Being and Time*, leading to questions about the technology and about Being itself. There have been many different attempts to explain the place of tools and techniques in *Being and Time*. In this paper, I have chosen to re-evaluate Heidegger's theory of tools through critical comments from Graham Harman, a representative of Speculative Realism. I argue that Harman is partly correct in his charges that the perspective of grasping Being through tool, i.e., ready-to-hand in *Being and Time*, is inadequate. For in the context of *Being and Time*, Heidegger's tool theory can be considered a kind of correlationism that not only does not fully grasp the existence of Being, but if one starts from this practical relationship with beings, one can even rationalize the radical conclusion of the late conception of modern technology, i.e., *Gestell*.

However, the Speculative Realism advocated by Harman, i.e., the view of all tools and beings as Objects, is no more convincing than what he criticizes. In contrast, Heidegger's correlationism may be a way of recognizing the finitude of our knowledge.

**Keywords:** Speculative Realism, Correlationism, Subjectivity, Harman, Heidegger

キーワード：思弁的実在論、相関主義、主体性、ハーマン、ハイデガー

周知のように、道具とその「手段性」の説明は、『存在と時間』の第1編において、「環境世界性と世界性一般との分析 (Umweltlichkeit und Weltlichkeit überhaupt)」の枠内で分析される。この分析に先行し、同時にそれを導くのは、「存在への問い」である。その分析によって、現存在、世界、存在者の3つの関係が存在論的分析によって明らかにされる。しかしながら、『存在と時間』(以下SZで略記)における自然や存在者 (Seiendes) の捉え方と、「転回 (Kehre)」以降の後期における捉え方では大きな変化が見られる。

森は造林であり、山は石切場であり、河は水力であり、風は「帆にはらむ」風なのである。<sup>1</sup>

他方で、同じく存在者と人間の関係に焦点を当てる、「転回」以降におけるハイデガーの著作では、その立場が全く逆に変化している。彼は、現代技術、すなわち「総かり立て体制 (Gestell)」において、存在者と自然は、人間が利用する資源として開示され、そのような状況は、形而上学と「挑発 (Herausforderung)」の結果である、と主張する。

水力発電所が、ライン川に立て置かれています。発電所は川の流れを水圧へとかり立て、水圧はタービンをかり立てて回転させ…川の流れは発電所の内へ立て塞がれています。川が川として今現になんであるかと言えば、要するに水圧供給係なのですが、そのことは発電所の本質から来ているのです。<sup>3</sup>

したがって、存在者は、例えば瓶、物として考えなければならない、「物の物化のはたらきから、瓶という種類の現前的にあり続けるものが現前的にあり続けるはたらきは、出来事としておのずと本有化され、ようやく規定されるものである。」<sup>4</sup>

ハイデガーの哲学では、人間と存在者との関係についての捉え方が変わったのである。では、存在者とはいったいどのように道具として現れ、現存在によって把握されるのだろうか？ 道具として、あるいは物として、存在者をどのように理解すればよいのだろうか。さらに、SZにおける存在者の捉え方が、何らかの不足があることを示唆しているのだろうか。

---

<sup>1</sup> Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, Tübingen, Max Niemeyer, 1993, S. 70. 日本語訳は、『存在と時間』原佑・渡邊二郎訳、中公クラシックス参照。

<sup>2</sup> この後ハイデガーはさらに、その立場を強めて、以下のように指摘した。「人間の諸々の関わる態度の最も身近な範囲において差し当たってかつ不断に現前に存しているもの、そしてそれに応じて不断に意のままになるものは、我々が不断にかかわりを持っている使用物の全体であり、その固有の意味に従って、それら自身互いに働きあっているある諸物の全体、使用される道具と不断に利用される自然の所産、つまり家や庭、森や野原、太陽、光や熱である。[…] したがって、存在者は、事物の意のままになるものというほどのことを意味するのである。 (Demnach bedeutet Seiendes soviel wie vorhandenes Verfügbares.)」ハイデッガー『現象学の根本諸問題』溝口純一他訳、創文社、2001年、156-157頁。

<sup>3</sup> ハイデッガー『技術とは何だろうか』森一郎編訳、講談社学術文庫、2019年、114頁。

<sup>4</sup> ハイデッガー『ブレーメン講演とフライブルク講演』森一郎他訳、創文社、2003年、22頁。

この問いに対して、「思弁的実在論（Speculative Realism）」の代表者であるグレアム・ハーマンは、SZにおける存在者は、現象学的な立場から、すなわち人間と存在者との関係からでは十分に理解できないと主張する。ハーマンは、SZが失敗した理由は、現象学的アプローチ、つまり存在者を現存在との関係から捉える「相関主義（correlationism）」として失敗したことにあり、したがって、存在者は関係の中の道具としてではなく、関係から独立する「対象（Object）」として見なければならぬと考えている。逆にハイデガーは、現象学的アプローチを堅持し続け、後期では存在者を物として理解しようとする。

本稿では、以下の3つの疑問への対応を試みている。

1. SZにおける現存在の存在者の理解の立場については何が不十分なのか。
2. ハーマンの実在論の立場から見ると、ハイデガーの哲学全体の現象学という方法は、なぜ批判されなければならないのか。
3. ハイデガー自身はハーマンの批判問題に対してその後期の哲学において、解決したと言えるか、また、ハーマンのアプローチとハイデガーのアプローチはどのように異なるか。

## 1. 道具から対象へ

SZでは、世界 - 内 - 存在としての現存在は、「道具的存在（Zuhanden）」「事物的存在（Vorhanden）」と他の現存在との「共存在（Mitsein）」という3つの主要な存在様式で他の存在者と出会うのである。現存在にとって存在者とは何かという問いに対する答えが、まずは道具的存在者というのである。この分析を通じて、ハイデガーは、現存在にとっての存在者を理解するための重要な手がかりは、世界における関係のネットワーク内に、すなわち道具的存在、ハーマンの言葉を借りれば「道具 - 存在」であると主張する。

しかし、ハーマンは、このような関係性に基づく存在者の扱い方を、道具の存在をその関係性から離れると理解不可能だという理由で否定している。これはハーマンの提起した鋭い問いかけである。道具的存在者、たとえば今この紙が、火をつけて初めて「可燃物」として認識される、つまり「火」という現象との関係性を持っていることを想像してみよう。その関係から道具が引き離されてしまえば、その存在者の現れ方も把握することはできない。こうしてハーマンは主張する。

事物の存在があらゆる理論と実践の背後に隠れているという主張は、人間的現存在が有する何らかの貴重な長所や短所に由来する事態ではなく、どんな関係も——無生物的關係でさえ——それが関わるものを翻訳ないし歪曲してしまうという事実<sup>5</sup>に由来する。…言い換えれば、対象の「退隠（withdrawal）」は、人間やいくつかの賢い動物だけを悩ます認知的トラウマではなく、あらゆる関係の恒久的な不十分さを表現しているのである。<sup>5</sup>

---

<sup>5</sup> グレアム・ハーマン『四方対象』岡嶋隆佑監訳・山下智弘他訳、人文書院、2017年、73-74頁。

ハーマンの考えでは、SZにおけるハイデガーの道具分析はあまりにも体系的で、ハイデガーを「相関主義者」にしている。なぜなら、現存在の使う道具が見られる場合も使われる場合も、いずれの場合もそれ自体ではなく、他の何かとの関係においてのみ扱われているからである。<sup>6</sup>

さらにハーマンは、彼自身の哲学を「唯物論なき実在論」と称する。ハイデガーが「存在者」と「現存在」の間に決定的な区別を設けようとしたにもかかわらず、ハーマンはハイデガーが与えてくれるのは現実と関係の根本的な違いであると考えたのである。<sup>7</sup> ハーマンは、ハイデガーが後期に提唱した「対象」と「物」の区別を故意に無視し、対象と物を同列に扱っている<sup>8</sup>。ハーマンは、道具は関係において明らかにされる対象・物の一部に過ぎず、関係から独立した対象・物はその関係に先立ってある、と主張する。

ハイデガーの反形而上学の立場に背を向けて、ハーマンは自らの哲学を、認識論的地位に依存しない、つまり主体と客体の関係を知ることには依存しない、対象指向の存在論を形成する試みであると位置づけるのである。このように、「思弁的実在論」を標榜するハーマンにとって、ハイデガーの基本的立場である、関係を通じて対象を把握する現象学的アプローチへの批判は、最も基本的な主張の一つである。ハーマンは、対象の独立した実在性を強調する。

ハイデガーの道具分析の体系的な主張を攻撃した後、ハーマンはSZの第二の、影響力のある主張を攻撃する。それは、ハイデガーが存在者を「事物 (res)」に遡り、古代ギリシアの「プラグマタ (pragmata)」の概念に戻って存在者の言葉を説明すると、存在者は「道具的存在者」として限定される、というものである。

ギリシア人たちは「諸事物」をあらわす一つの適切な術語をもっていた。それは、プラグマタという術語であって、言いかえれば、ひとが配慮的に気遣いつつある交渉 (プラクシス) においてそれと関係をもつ当のものである。だが、ギリシア人たちは、プラグマタの種別的に「実用的」な性格を、存在論的には、まさしく曖昧のままに放置しておき、プラグマタを「差しあたって」は「たんなる諸事物」として規定した。<sup>9</sup>

このようにプラクシスを遡及的に扱うと、一種の主観主義に陥ってしまう。ハーマンにとって、現存在の世界は、「より本来的な次元の存在者に由来する、1つの具体的で不安定な表面」である「として」の世界である。<sup>10</sup>ハーマンは、「道具的存在者」を単なる「道具」に人間化しようとする試みをすべて否定している。解釈学的な「としての構造 (Als-Struktur)」

<sup>6</sup> 同上、73頁。

<sup>7</sup> 同上、73-74頁。

<sup>8</sup> 「私は非人間的な対象同士の因果関係を、人間による対象の知覚と区別なく論じる。しかし私はハイデガーによる (否定的な意味での) 「対象」と (肯定的な意味での) 「事物 (thing)」との区別を採用していないという点にもまた注意すべきである。「対象」という言葉がブレンターノ学派において獲得した一般化の力は、ハイデガーの用語法のカルト的な儀式の生贄となってしまふにはあまりにも惜しいものなのである。」(同上、14頁)

<sup>9</sup> Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, S.68.

<sup>10</sup> Harman, *Towards Speculative Realism*, 2010, Zero Books. p.9. なお、日本語訳がない著作についての翻訳は、筆者による。

を通じて道具を説明する、このような方法は、独立して存在する対象を無視するものだと主張している。

ハーマンは、「道具的存在者性」と「事物的存在者性」の2つを説明することで、対象の独立性を説明する。ハーマンは、ハイデガーの考察が、従来の存在者の見方の根本的な逆転を生み出したことは認めている。ハーマンは、まずハイデガーの理論に賛成する、つまり、私たちは、道具としての存在者には、2つの別個の側面があることがわかる。(1) 単純化できない、還元できなく隠されているレベルの側面、(2) 感覚的で探究可能な側面。「ハイデガー的な言い方をすれば、存在論的に見た道具と、存在的に見た同じ道具があるのだ」<sup>11</sup>とある。

しかし、ハーマンは、どちらの手段によっても、人間の現存在は道具に完全にアプローチすることができないと主張する。つまり、テオリアだけでなくプラクシスによっても存在者を把握することは不十分だと主張する。

要するに、理論的な抽象と道具の使用は、どちらも等しく道具そのものを歪曲するという罪を犯してしまっているのである。道具は、それが「使用される」限り、意識内のイメージに劣らず事物的に存在する。しかし、道具は「使われる」のではなく、存在する。そして、存在する限りにおいて、道具は、人間の理論と実践、いずれの関係によっても汲み尽くされることはないのである。<sup>12</sup>

要するに、「道具的存在」にせよ、「事物的存在」にせよ、関係によって存在を把握することは、存在者そのものに本当に到達することはできないとハーマンは主張しているのである。したがって、ハーマンにとっては、道具の存在で重要なのは用途ではない、なぜなら道具は工芸品でも装置でもないのだから。ハーマンは自分の主張を次のようにまとめている。「道具は役に立つのではない。それが存在である限りにおいてのみ、有用であるか有害であるか無関心であるかを証明することができる」<sup>13</sup>と述べている。

## 2. 主体性の問題

つまり、ここでハーマンは、存在者とは何か、私たちは存在者をどのように理解すべきなのか、そして、この問いをSZの文脈で考えると、事物的や道具的存在の関係を通じて、存在者を把握することができるのだろうか、という問いを投げかけている。これらは良い質問だが、残念ながらハーマンは誤った答えを与えている。

ハーマンの非難は、主に2つの原因からきている。ハーマンは第一に、現存在の優位性を取り消してしまう。彼はこう主張する。

現存在の本質はその実在にあるという事実である。「理性的な動物」として、あるいは「肉

<sup>11</sup> Harman, *Tool-Being*, 2002, Open Court. p.22.

<sup>12</sup> 『四方対象』、73頁。

<sup>13</sup> Harman, *Tool-Being*, 2002, p.186.

体と魂の融合」として、大きさを決められるものではなく、現存在はその実在という行為においてのみ理解されるのである。現存在を何らかの表象やエイドス、あるいは外的な特性によって定義しようとする主張は、その課題に応えることができないのである。しかし、現存在を表象に還元できないことは、ハンマーや、砂や岩にも共通することである。これらの実体はいずれも、単に「道具的存在」であるかのように理解することができないことは、すでに見たとおりである。道具的存在とは、「人が使える」という意味ではなく、「ある効果を単に表現する」という意味である。したがって、第二の意味での現存在は、どんなに直観に反しているように見えても、道具と絶対的に等価なのである。<sup>14</sup>

ここで最も重要なのは、現存在の優位性の取り消しによって、「存在」の問題も解消されることである。

第二に、存在者／道具とは何かということに関して、ハーマンは、そのような相関主義は結局、関係を通じて認識論的な有限性に遭遇することになるので、まず、存在者を個々の対象として理解するべきだと主張している。

したがって、ハーマンの論点は以下の通りである。

1. 関係における現存在の観点から、すなわち相関主義の観点から存在を理解する方法は、関係による制限があるので、存在者／対象という実体／現実を完全に把握することはできない。

そこから派生する二次的な問題は：

2. SZにおいて、プラクシスとテオリアのどちらの視点から存在を理解しようとも、その理解は存在者にとっては不完全であり、存在者の現れていない側面、つまり「余剰 (surplus)」がある。

この2つの非難から、ハーマンは、存在者が関係を通じて理解される限り、対象を完全に把握することは不可能であり、この関係のみを把握することができると結論づける。この結論の根拠は、関係を通じて存在者・対象を理解することは、本質的に欠陥があるということである。

私は、現存在が存在者の全体性を理解できないことに同意し、SZにおいてこの不十分さをうまく指摘していると思う。なぜなら、SZにおいては、存在者を「事物」に限定、還元し、そして古代ギリシャの「プラグマタ」概念まで遡ってアプローチすることで、存在者が「道具的存在者」として現れ、現存在が与える主観的な道具性によって束縛されることになってしまうからである。したがって、結果として、このようなプラクシスの束縛によって、フィシス、すなわち存在者全体が人間のための道具にしか現れなくなるのである。

ここでハイデガーが遭遇する問題は、主観性の有限性である。この有限性とは、主観性の限界のことである。現存在は、コンテクストにおいて「存在者」との関係を通じて存在を理解することができるが、ハイデガーはこの関係性が課す限界を気づいたので、SZが完成しなかったとも考えられる。

---

<sup>14</sup> Harman, *Towards Speculative Realism*, 2010, p.8.

SZにおいて、私たち現存在は、思想家や、観想者のような者ではなく、主に、ほとんどの場合は、何かに従事して、能動的な行動者である。このため、ある存在者がまず、そしてほとんどの場合、我々の投企に利用される準備が整ったものとして我々の前に姿を現す。これが、現存在が見る世界、すなわち我々の活動に基づいて組織された存在者全体である。もちろん、私たちはまた、プラクシスを抜きにして冷静に観察することもできるので、存在者／道具は「事物的存在者（Vorhandenes）」でもありうるのである。

ここで重要なのは、「存在」の意味は、「存在」を理解する「現存在」を考察することによってのみ明らかになり、それゆえ意味を提供しうるということである。このことは、意味がこの特定の存在の周辺にしばしば漂っているのも、もし私たちが現存在の近くにいれば、それに遭遇する可能性が高いということの意味するものではない。現存在は意味がたまたまある場所ではなく、現存在が意味を生み出すのである。私たちは意味のある生き方をすることによって意味を作るのである。ハイデガーが現存在は存在を理解すると言うとき、この動詞は、私たちに迫る事実を受動的に受け入れることではなく、能動的な生産過程として理解されるべきである。

このように、SZでは、第1編で存在者がどのように自らを示すのかを説明し、第2編で存在者に対する私たちの開示性の構造を解明していることがわかる。ハイデガーはSZにおいて、人間が存在者にどのように意味を与えるかを正確に説明している。つまり、我々は存在者の可能性と不可能性を（実践的にも理論的にも）把握し、そうすることで存在者の状況を把握する。例えば、ある存在者／道具が茶碗として意味を持つためには、その茶碗が何に使えるか、何に使うべきかという観点で把握することである。この「できる」というのは、論理的・物理的に可能・不可能ということではなく、世界の中で明らかにされていることを意味し、また、そのことだけを意味するのである。

しかし、この理解可能性は、現存在としての存在の視点を制限する。なぜなら、理解可能なものはすべてアприオリであると思われ、そのように理解できるのは、まさに我々が理解でき、存在が理解可能であるからである。しかし、どのように理解しようとも、それは主観性の可能性に過ぎない。つまり、開示性に基づくことで我々は存在を理解することができるが、その有限性、つまり存在の隠蔽性を捉えることができないのである。

したがって、SZにおいて、ハイデガーが呼び出す時間性は、現存在の存在への開示性を、その開示性の有限性を説明することなく説明するものである。したがって、現存在にとっての世界の全体は、関係からなる「としての」構造の世界でしかありえない。我々の主観性は有限性によって制限されているのだ。

これに対してハーマンは、現存在の視点からの関係で存在者を理解することは不完全なことであり、関係-システムの文脈に物を置くのではなく、主観性の関係から離れたところで独立して対象を見るべきであると強調する。

ハーマンはこの主観性の問題を認識しているが、その方向性を間違えているように思える。SZにおける主観性の有限性の問題に対するハーマンの解答は、それを否定すること、つまり、世界内の関係を通じて物事の意味を理解するという現存在の観点から存在を考えるのではなく、単に対象として見るべきだという主張である。このアプローチは、主体の

有限性を「超越」しているように見える。では、本当に主観性なしに物事を見ることができるのだろうか、という疑問がある。答えは全く逆で、このアプローチでは主観性から全く逃れられないし、有限性の限界を意識することさえできない。

### 3. 与えるか、与えられるか、それが問題だ

ハイデガーの根本的な立場は、確かに相関主義として考えることができる。しかし、それは解釈学的相関主義であり、解釈学的循環の中で主体をも客体として考えなければならず、解釈学的循環の中でしか存在を理解できないという点で独特である。この立場は、主体の有限性を前提にしている。そのような関係においてのみ、存在の理解は意味を持つのである。私たちは、視点なしに物事を見ることはできず、関係のない対象に到達することはできない。

では、なぜ相関主義が正当であり、物事を独立した対象として考えることが正当でないのか。第一に、理解は独立した対象の理解だけでなく、世界の理解でもある。そのような理解だけが、存在者の意味を理解することができるのであって、存在者性だけを理解するのではない。したがって、理解とは、世界の特定の要素について事実を発見する以上のものを伴う。より確かな本来の意味での理解とは、ハイデガーの言うところの「可能性を明らかにすること」である。孤立した原子的な事実を次々に発見しても、意味のある理解可能な世界についての理解は得られず、むしろ、つながりのない存在者性の集合体となってしまう。理解とは、対象の集積ではなく、これらの事実がどのように可能であるかの解釈である。

存在を理解することのできる特別な存在者として、我々現存在が理解するものは、単なる対象の存在者性でも、単なる事実の集積でもないのである。ハーマンの实在論は、存在者の存在者性をその最終の目的としている。しかし、ハーマンの考えでは、いくら対象を理解しても、その対象の集積は何の意味も生み出さず、私たちの生きる世界を形成することはないのである。このような関係的理解は、確かに SZ におけるハイデガーの思想の中心であるが、しかしこの思想はハイデガーの伝統的哲学批判、つまり伝統的形而上学への批判を通じて現存在の存在了解を回復しようとする文脈で理解されなければ、その「相関主義」について誤解を招くことになる。この誤解によって、ハーマンの批評は、ハイデガーの最も中心的な目的である存在の意味を見逃している。なぜなら、ハイデガーが目指すのは、私たちが、最も特殊な存在者、現存在として、「存在的 (ontisch)」なレベルで、実践的であれ、理論的であれ、存在者を理解するだけでなく、「存在論的 (ontologisch)」なレベルで存在を理解できるようになるということだからである。ここでハーマンの批判は、存在論的な理解を全く放棄し、存在的な存在者を中心とすることになり、ハイデガーの誤りを正しく指摘できないばかりか、存在者を理解するために存在の理解を放棄するというハイデガーのアンチテーゼにさらに自分を追い込むことになるのであろう。

第二に、私たちがあるものを理解しようとするとき、その理解のレベルもまた有限であ



る。しかし、このような有限性も優位性をもつものでもある。なぜなら、現存在である我々は、我々の認識の有限性を超えて何かを理解することはできず、人と物の関係においてのみ、存在の意味を理解することができるのだからである。このような有限性と優位性は、現存在にのみ属する関係を与え、したがってこの関係こそが人間と存在の「共属する（*zusammengehören*）」ことを作るのである。一方では、この関係は私たちの認識を制限し、他方では、私たちはこの有限性を認識することができるので、「脱 - 存する（*ek-sistieren*）」ことができる。この有限性を主観的に理解することが、私たちを人間たらしめるのである。

ハーマンとハイデガーは、有限性を異なる次元で捉えている。ハーマンにとって超越しようとするのは、客観的存在者の有限性、つまり有限の関係を超えて存在者を理解する過程である。しかし、他方でハイデガーが見ているのは、主体の有限性である。つまり、なぜ理解できるのか、それはこの理解そのものの有限だからである。

人間が存在をどのように理解するのかを問う方法は、SZにおいては、存在者から存在者の存在へ、という徐々に還元していく過程である。しかし、なぜ我々が存在者を理解できるのかについての答えは、ただその問いをもう一步後退させることにすぎないであろう。私たちがこうした現象を経験するのは、こうした存在者を理解するからであり、こうした存在者を理解するのは、私たちが現存在であり、特殊の様式で存在するからである。しかし、なぜ私たちはこのように特殊な様式で存在しているのか、なぜ私たちだけが現存在として存在を理解することができるのか、という疑問が再び湧いてくる。ハイデガーはSZにおいて、これに対する答えを持っておらず、たとえ持っていたとしても、答えの後に問いが再び現れ、説明不可能なものへと限りなく後退していく。

どこまで後退しても、それ自体が説明不可能な地点に到達してしまうのだ。問題は、SZが悪い答えを与えているのではなく、実は答えを与えていること、つまり、存在が私たちに開示する事実と方法について「究極的」な説明をしていることにある。私たちの「明らみ（*Lichtung*）」を説明できる存在が何であれ、それ自体を説明することはできないので、どんな説明も必然的に最終段階を説明できないままにしておくことにならざるを得ないのである。「あらゆる形而上学において、何か本質的なことが、つまり形而上学自身の根底が、思惟されないままに留まっている」。<sup>15</sup>これが彼の言う根拠のない理由である。私たちは理由を見つけることができるが、これらの理由はそれ自体根拠のないものでなければならない。私たちは存在についての意味を与えることができるが、一方でそれは存在から与えられた贈り物である。

ハイデガーの前期の作品では、現存在はある開ける場所を開示していたが、今では主導権が、存在に移っている。私たちの思考は、物事が私たちを襲うことに対する反応に過ぎず、私たちの行動は、反応である。存在の呼びかけは説明不可能であり、したがって、基礎的存在論、つまり、なぜ存在が与えるのか、なぜそのようにあるのかを理解しようとするあらゆる試みを台無しにする。

我々は存在者に心に向け、存在者の上に築き、存在者に身を支えるが、かかる存在者の

---

<sup>15</sup> ハイデッガー『思惟とは何の謂いか』四日谷敬子他訳、創文社、1986年、111頁。

ようには、存在は我々に如何なる根拠も地盤も与えない。存在は、かかる根拠づけの役回りに対する断りを - 言うことであり、すべての根拠的なものを拒否し、脱 - 底 (深淵) (ab-gründig) 的である。<sup>16</sup>

現存在と存在はなぜそうなのかという問いには答えがある。しかし、この答えは非 - 回答であり、それは「それが与える (Es gibt)」からである。存在を理解しうる現存在にとって、存在とはすでに明らかにされている、与えられた「贈り物」なのである。このことは、後期におけるハイデガーの真理概念の位置づけの変化にも反映されている。

この解釈学的な存在の定義は、存在と開示に対する現存在の影響を排除していて、SZ におけるあらゆる主観主義を克服するものである。現存在が開示性を突き放すのではなく、「存在」はそれ自体を開け開き、その発生と出来事そのものに私たちを引き込むのである。

このハイデガー後期の、与えることから与えられることまでの過程は一方通行ではなく、両者の間の運動を同時に強調している。この与えるということは、与えられるということに基づくのであり、したがって、このような「与えられる」ということは、私たちの思考や認識が、常に世界の明確な様式 (一方から他方、主体から客体、自己から他者、またその逆) によって組織されていることを認識させるのである。

ハイデガーが与えた答えは、究極的な答えの探求の拒否であり、それはその後、一種の解釈学的な循環を形成することになる。存在そのものの了解可能で所与の性格は、人間としての私たちの基本的な属性である。この循環の中で、またこの循環を超越することによってのみ、新しい理解が生まれるのであって、不変で永遠の答えを追い求めるのではない。

このような存在に関する理解は、主観性の問題に還元できるものであろう。それは、なぜ私たちが人生を経験する特定の方法を持っているのかを問うことなく、存在のレベルで止まってしまう超越的形而上学を克服するものである。それは、現存在から主導権と支配権を奪うことによって主観性を克服し、現存在の実存主義という特定の所与の地平から、地平性の所与性、つまり、私たちが何にでも気づくことを可能にする地平を持っているという事実へと私たちを移動させるものなのである。

## おわりに

ハーマンにとって、彼の焦点は主体の有限性の問題ではなく、いかにして直接的に対象に到達するかということにある。そのため、彼は形而上学的な次元にとどまって、存在の問題を問っている。このハーマンの实在論的な見方は、問いを立てるための、したがって存在ないし出発点としての人間を最初から忘れている。この形而上学に特徴的な態度は、ハイデガーの批判の対象であったものである。

逆に言えば、ハイデガーは最初から「存在の問題」に専念しているが、ハイデガー哲学の核心は人間の問題である。ハーマンにとっての唯一の問題は、存在者とは何か、それが

---

<sup>16</sup> ハイデッガー『ニーチェ II』円増治之他訳、創文社、2004年、233頁。

道具として、あるいは物として、あるいは対象として明らかにされているのかを直接的に問い、その結果、物としての存在の全体性を探究しようとするのであった。

しかし、ハイデガーが本当に問題にしているのは、多くの存在者のうち、何かが存在することを知っているだけでなく、なぜそれが存在するのかを知ろうとする存在者がいることであり、その特定の存在が人間であるということである。ハイデガーにとっての唯一の「驚き（*thaumazein*）」は、なぜ我々が存在を理解しているのか、その事実について、さらにその根拠を問うことができるということ、この問いの可能性が開かれていること、このことである。